

単元『西陣織』<中小工業>(五年)の研究

◇単元『西陣織』<中小工業>(五年)の研究

実践記録 永田時雄
検討協力者と 後藤靖
して

第一部・実践記録

5年単元『西陣織』

京都市立日彰小学校

永田時雄

I 設定の根拠

「西陣織」は京都市にとっては代表的な、また重要な郷土産業である。十数工程以上に別れた複雑な分業によって生産されるものが、そのほとんどで、この織物の生産、流通の仕事に直接間接に従事し、これによって生計を立てている者は、市民の三割弱約三十万におよんでいるといわれる。正に京都市の経済の死活の鍵を握るものといっても決して過言ではないのである。ところが、この西陣織の工業をカリキュラム誌(一九五三・十)で梶西先生が述べられた分析視角から眺めて見ると、実に多くの問題を内蔵しているのである。すなわち

1、生産工程の非科学的なこと(いまだに手機が過半数を占め、全国各地の絹織物産地に比し最も古い生産様式である)

2、生産組織に封建性が根強く残存し、主従関係によって業者が結ばれていること。

3、封建性が残存し産業革命以前の生産方法をとっているままに、そこにすでに資本主義生産の矛盾が現れて零細な企業家ならびに賃織業者が危機に瀕していること。

等があげられ、視野を拡げて凝視すれば、日本の生産の課題が西陣織の生産工業に象徴的に現れているとも考えられるのである。

子どもたちの家庭すなわち私の学校の校下には、直接西陣織の生産には従事しないが、呉服問屋が伝統的に多く、そのほとんどが西陣織を取扱っている。だから、西陣の動向は直接生活にひびいてくるのである。また“着倒れ京都”という俗諺に表されているごとく、この高級な織物を冠婚葬祭、外出用、七五三詣りなどに着用するのが、依然として今日の常識

であり、子どもたちの関心もとくに深い。そこで「西陣織」の単元を設定し、生産にまつわる矛盾を指摘し、さらに改善への意慾を育てたいと考え目標をつぎのようにきめた。

目 標

- 1、西陣織の工業は、そのほとんどが、家内工業、手工業、家族労働によつておこなわれていること。
- 2、全国の絹織物産地の機械による廉価な大量生産に圧迫されて、次第に販路が縮小していること。
- 3、非科学的生活法、封建的な生産組織を改革しなければならないこと。
- 4、高次の芸術的高級織物の生産だけでなく、大衆向の実用衣料生産をして、市場を獲得しなければならないこと。
- 5、問題解決の結論を、歴史的地理的に広く研究して広い視野から多角的に出す学習能力を養うこと。

II 展開の記録

一、西陣織について話し合う

単元の設定理由について簡単に説明して、西陣織についての子供の既得の知識経験について自由に発表させた。

- ・父母が冠婚葬祭の時や外出着にきる。みんな和服で美しくて上品だ。家の人は渋い柄だといっている。
- ・父や兄のネクタイも西陣織だし、額もあるから和服だけではない。
- ・小さい時、七五三に着てお詣りをしたことがある。十三詣りにも着るのだ。
- ・お正月の晴着に買ってほしいが、高価でなかなか買ってもらえない。なぜあんなに高価なのだろう。
- ・きれいな模様はどうして作っているのだろう。作っている所が見たい。
- ・京都の西陣独特のもので他地方ではまねができないのだ。しかも手で織っている。僕は見に行つたことがある。工場ではなく家の土間で作っていた。
- ・家の近所に西陣織の下絵をかいている絵かきさんがいる。
- ・僕の家では西陣織を使って、上等の下駄の鼻おを作っている。たんすに入れる匂袋を作っている。かけ軸のふちばりをしている。
- ・大人はよく“西陣は古い伝統がある”というが、いつ頃から始まつたのだろう。だれが発明したのだろう。
- ・京都の代表的な工業で小さいときからよく名をきいている。

西陣織が家にはない子は転入学した二名だけで、他のすべての家庭が持つてお

り、子どもたちの関心も大変深く、上記のように活潑に発表し、質問や疑問もでてきた。しかも西陣織の特徴だといわれることは、外面的にはいちおう知っていた。そこでこんどは実物を持ちより、実際に眺めながら種類や用途、さらに特徴について話しあうことにした。

二、西陣織を眺めて

父母の着物やネクタイ等、さらに業者の子どもが諸種のサンプルを持ってきたので、教室のなかにならべると、美しい展示会のようになった。種類と用途については、私が教えられることがほとんどで子どもたちは、家庭でよくきいていてよく発表した。

- ・つづれ織—帯地、ふくさ、うちしき、僧衣等
- ・から織—帯地、「能」の衣しよう等
- ・大和錦—神様用のものをつくる「みすべり」等
- ・金らん—表装用（かけじく、びょうぶ、がく、ふくさ等）、「能」の衣しよう、僧の「けさ」等
- ・こま織—着物
- ・お召—着物
- ・ドレープ—カーテン用
- ・ビロード—服地、カーテン、敷物等
- ・どんちよう—舞台用のカーテン地

これについて、見ながら話しあつて特徴を考えて見た。

- ・毎日着る実用的な着物よりも礼服や、神式、仏式の衣服、調度品を作るものの種類が多い。
- ・金糸、銀糸や、模様が生地から浮きだしたように織つてある。
- ・生地が厚く重い。
- ・種類が非常に多い。
- ・着物や帯等にする和服用のものが多いが、服地、ネクタイカーテン等洋式のものも作られている。

これらの特徴を考えている過程においても、子どもたちの意識は“どうして作るのだろう”ということで、次の学習の希望は作り方の研究が圧倒的であつた。部分的には、もう知っている子どももいたが、もつとくわしくできれば種類別に家の人に聞いたり、近所の業者にきいてくることにした。

三、作り方をしらべる

1、今までに知っていること、聞いてきたこと

- ・糸が先に染められ、そめた糸で下絵の通りに織つて行く。
- ・他の織物は先に白生地を作ってから模

様をそめる。これが大きな特色だ。

- ・西陣独得の高級品（主として帯地）は手工業でないと機械ではできないのだとおじいさんがいつていた。
- ・ジャカードという機械でつくる。
- ・つづれ織は、つめにぎざぎざを入れて、そのつめ先でおる。
- ・むつかしい織り方は十年位習わないとおぼえられない。
- ・非常に細かい分業に別れて何軒も何人もの家、人を通してできあがる。長い時間かかる高い値段になる。

家庭でのサゼスションが相当はいつたらしく、どの子どももこれらのことを調べてきて発表した。本当にどんな所で、どのようにして作っているのか、見学に行くことにして、見学の計画を立てた。

2、見学、資料の作成と検討

西陣織の生産がおこなわれている地域をしらべて見た。京都市の地図に出ていような西陣工場は「川島織物」、「竜村工場」、「矢代工場」が見つかっただけであつた。わずかに三工場しかみつからないので、京都年鑑（都出版）でしらべてみた。つぎのような資料が見つかった。

- ・独立した工場を持つて五十人以上やつている工場→十戸以下→大工場
 - ・使用人十人～五十人位の工場
 - 十パーセント→
 - ・使用人十人までの工場
 - 二十パーセント→小工場
 - ・家族だけでやつているもの
 - 七十パーセント→賃織
- ※製織をしている戸数は五千戸内外とある。

子どもたちはこれを見て、「家の中でやつているから地図には出ていないのだ。」「小さな工場や賃織がほとんどだ。」と話しあつた。業者の子どもの家庭からの紹介で「矢代御召工場」を全員で見学することができた。矢代工場は西陣屈指の大工場なので、大工場の生産の形態は見学によつてだいたい理解できたが、子どもたちは「小工場」や「賃織」のようすはどうだろうかと考え、また業者の子どものを中心にグループをきめて、土曜日、日曜日などに見学にでかけ、いろいろな調査をやつてきた。資料もたくさん集つて教室の掲示板が一ぱいになつた。私は京都大学経済学部の堀江英一教授をたずね、同氏の紹介で堀江教授と「西陣機業の研究」（有斐閣）を共著しておられる、京都大学講師後藤靖氏から懇切な内容の教示を受けた。子どもたちのやつた現場の調査、あつめた資料、さ

らに私が後藤氏から受けた資料とを合同でまとめたたびたび討議をして次のような表を作つた。（別表、1、2、3、4）これが子どもたちの手でプリントにされた。できあがつたプリントをみて話しあいをしてしながら検討をおこなつた。以下主にでた子どもの意見をあげてみる。

《別表1を見て》

- ・細かく別れた分業だ。これではできるだけ長い時間がかかるし、これらの人々がみんなお金をもらえれば製品は高くなるはずだ。
- ・仲買が多くてますます値段が高くなる。もつとへらせないものか。
- ・賃織の人はしんどい仕事をして、お金が少いからかわいそうだ。
- ・一工場の中で流れた作業をやるには、とてもたくさんの仕事場がある。これではなかなかだ。大工場には大資本がいるはずだ。

※西陣機業では、これらの諸工程を全部一つの工場内に併有している所はほとんどない。各工程は別個の一業体によつておこなわれている。各業者は諸工程を併有するだけの資本を持つていない。

- ・この仕事を一軒毎にやつているとできあがるまでには二十軒程の家を通るのはほんとうだね。

《別表2を見て》

- ・大工場は生糸製造工場や糸問屋、上仲買から買うから安くかえる。しかも大量に買入れるから安いのだ。
- ・小工場は大工場より高くつく製造工場から手に入るまでにたくさんの人々の手をくぐりすぎる。しかも少しづつから損だ。

《別表3を見て》

- ・五台までの小工場、賃織の人々程手織機が多い。働く人も家族だけだ。これではいくらでもできないし、おそい。
- ・百台以上の大工場になると力織機が多い。
- ・織機の合計でみるとやはり五台までの小工場、賃織が多い。
- ・働く人の合計でも五台まででやつている人が多い。
- ・西陣は小さな工場で家族だけで、しかも手織機を使つてやつている人々が多いのだ。

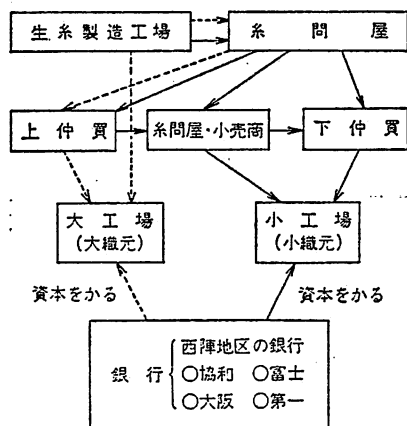
別表1、2、3をプリントして次々と話しあいによつて検討していつたが、どれにも共通することが多くあるので、別表4を教室で黒板一面に表をかくてそのなかに書きこんでいつてこれをプリント

単元『西陣織』<中小工業>(五年)の研究

原料の生糸が製織をする人にとどくまで

(入手経路)(後藤靖氏より受く)

(別表2)



西陣織の生産に使われている機械と働く人々

(別表3)

合働く人計	て人をやとつ	家く族だけで	織機合計	力織機	手織機	規経営模の
40.0 %	17.5 %	83.0 %	57.0 %	30.5 %	68.0 %	五台まで
14.0 %	14.6 %	13.0 %	11.8 %	11.0 %	12.2 %	十台まで
20.5 %	29.0 %	4.0 %	17.2 %	29.0 %	13.0 %	五十台まで
3.0 %	4.9 %	0	2.5 %	5.6 %	0.5 %	百台まで
22.5 %	34.0 %	0	11.4 %	24.5 %	6.3 %	百台以上
100 %	100 %	100 %	100 %	100 %	100 %	計

(昭和二十三年九月調べ)

にしてつくりあげた。子どもたちはこの表を見てこれはよくわかるというてよるこんだ。しかも自分たちで作ったよろこびもあつたのであろう。これをもとにしてまた話しあいを進めた。

《別表4を見て》

- ・大工場のような方法でやらないとだめだ。
- ・小工場のようなやり方では原料は高く、つくるのもおそくしかも仲買にうるので高くうれない。
- ・賃織の人はかわいそうだ。早く独立して仕事ができるようにしないとけない(これでは織元の家来のようなのだ)。
- ・織元はずるい。こんな業者はみんな大工場のようなやり方にすればいらなくなり、それだけ生産者がたくさんもうかるわけだ。
- ・賃織や小工場の人が協力して大工場を

立てたらよい。

- ・原料の仕入れにも販売にも仲買が多すぎる。もつと仲買を少くすれば安く仕入れて高くうれるのだ。
- ・もつとジャカード機や力織機を沢山使つて作るようにしないとだめだ。
- ・手織機は力織機でつくれる帯地(金らん、つづれ織り等)だけにすればよい。他はみなもつと機械化しないとけない。
- ・ねだんを安くしないとだんだんみんながかわなくなる。
- ・大工場ほどたくさんもうけ、小工場や賃織業者ほどもうけが少くなつていいる。これではだんだん差がきつくなる許りだ。

西陣機業の問題の焦点である 中小企業・零細工業の点にふれてきたが、この点の解決策については早急に結論をださ

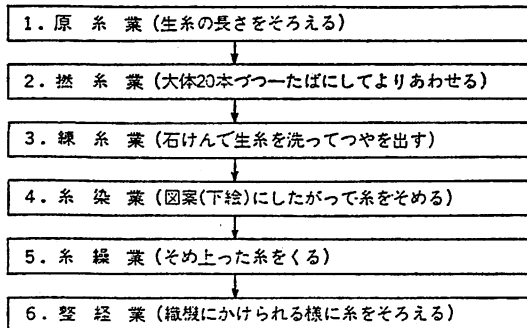
西陣織を作るために働く人々

(矢代工場見学の時得たもの)

西陣織が消費者にとどくまで

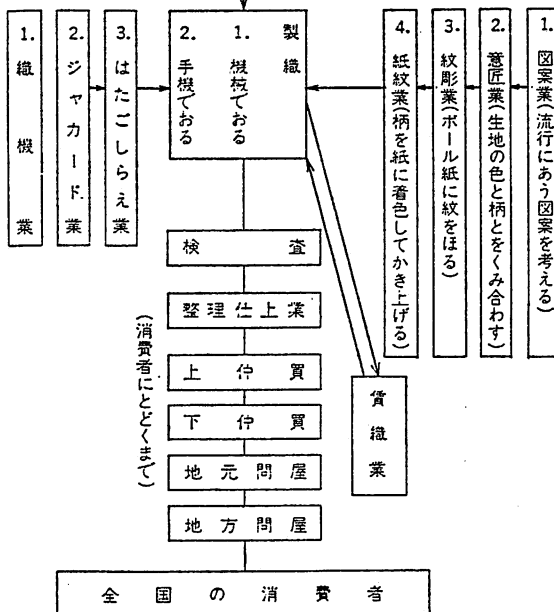
(この表の順に随って見学させてもらった)

(別表1)



(機械の準備)

(模様柄をつくる工程)



ず「どうしてこんな不公平な生産の形態に分れたのだろうか。」昔はどうだったのだろう。」かとサゼストして歴史的に探る意識をもちあげ、歴史的な研究に入つた。

四、昔の西陣織のようすをしらべる

資料は後藤氏からいただいた「西陣機業の研究」、佐々木信三郎著「西陣史」、「織物の西陣」が非常に役だった。子どもたちには年表を作らせて史実を記入させていった。子どもたちは史実には非常な興味をもち、年表作成はきわめてたねんによるこんでやつた。

この年表を見て、また作りながらでた質問をあわせて西陣織の現代の課題をさぐりながら、その特色をしらべ、解決策を考えていった。

- ・西陣織を作る人々は、古くから天皇、貴族、将軍等のきるぜいたくな高級品

(別表4)

西陣織を作る人々(生産の形態とそのちがい)

	大工場(完全に機械化された工場)	小工場(手機と力織機)	賃 織	織 元
資 本	1、大資本を持ち、困った時には銀行が長期に亘って安い利子でお金をかしてくれ 2、大工場だから全部の工程を自分の工場の中ですることが出来る 3、工場の拡張や機械の買入れ、製法の研究が自由にできる。	1、自分の財産を基にしてやっている。困った時でも銀行は少ししかお金を貸してくれない。 2、工場と住居とが、大てい一しよで拡張はできない。 3、下請けに出す工程が多い。 4、機械も新しいのが少しづつしか買えない。	1、資本はほとんど持っていない。自分の労働力だけが、全資本である。	1、織元も大きく二つに別れている。大きな資本を持つている織元は大工場にいてるし小さな織元は小工場位の資本でやっている。 2、銀行も大きな織元は多くのお金がかかりられるが小さな織元はほとんど貸してくれない。
製 法	1、流れ作業式で一工場の中で原料の加工から製品の完成まで一貫作業ができる(したがって短時間で早くでき加工賃も安くつく)つまり生産費が安くつく。 2、ほとんどが機械によつて作られている。力織機の使用できない帯地だけを手織機で作っている。	1、織機にかかる加工された原料を買ってきて織るだけの仕事をしている。 2、大工場より時間も長くかかる。	1、織機も原料も大てい織元から与えられその命令どおりに作る。 2、機械も手織機が多く力織機でも古い型のものが多く時間も大変ながくかかる。 3、帯地等の複雑なものは一反つくるのに二週間くらいかかる。しかもこの技術をおぼえるのに20年位かかる。	1、自分では全然つくらない。
原 料	1、製造業者から直接買い入れて加工する。 2、横浜、神戸の糸問屋から上仲買を通してかう。 3、大量に買い入れるので安く仕入れることができる。	1、横浜、神戸の糸問屋から、上仲買→下仲買の手を通して必要量だけ買い入れる。 2、ねだんも必要なだけかうので高くつく。	1、織元からあづかる。	1、大きな織元は大工場のように 小さな織元は小工場のよう } 買う
販 売 (販宣路伝)	1、百貨店や老舗と連絡して大量に直接販売している。 2、一般の人々の買う力がおちても一部の金持に売る方法がある。 3、全国各地に支店や出張販売所を設けて売りだす。 4、宣伝もラジオ、新聞、全国の支店を通じて大々的にやる。	1、小工場の製品→上仲買→下仲買→地元問屋→地方問屋→消費者。の順に行くので全部上仲買にうる。 2、宣伝は殆どやらないで売 上仲買はきまつている。 3、一般の売れ行きがわるくなると上仲買がかわらないので経営を小さくする。	1、全然必要がない。	1、地方問屋にうる所を得意として持っている。 2、大きな織元は宣伝もやっている。
労 働	1、50名以上の工員がいる。 2、労基法が適用されて8時間働く、それ以上働く手当がある。 3、女子の20歳位までの人が多い。 4、給料は女工で三五〇〇円から六〇〇〇円ぐらいで、特殊な技術をもっている人は一万円くらいもらっている。 5、日曜毎に休む。工場にお風呂があり、運動場がある。遠足やハイキングも時々やる。作業服をくれる。 6、健康保険や失業保険をしている。 7、労働組合はまだできていなかった(調査に行った時に)。	1、10人から50人位やとつて いる。 2、労基法が十分まもられず普通10時間働いている。忙しくなると夜おそくまでやっている。 3、働く人は、家族と近親の人や近所の人が多い。年よりや若い人等工場によつてまちまち。 4、給料はなかなか一定しない、もうからない時は給料がおくれたり少なくなつたりする。 5、仕事のひまな時に休む。きまつた休みはなく大体月に二回位休む。 6、病気やけがをした時は工場主から見舞金をもらう程度で。 7、失業すると失職でこまる	1、働く人は家族だけである。 2、手間賃を少しでも多くもらう為に普通12時間くらい働いている。 忙しい時は夜通しやることもしばしばある。 3、きまつた休みは全然ない。 4、賃金が安いのでレクリエーション等のよゆうがない。 給食費さえはらえない子が多いと聞いた。 5、労働の保障(保険等)は全然ない。	1、作る仕事は全然やらない。 2、原料の仕入と賃織のかんとか、製品を上仲買に売る交渉等に毎日働いている。

を命令で織っていたので、もともと賃織業のような性格をもっていたのだ。
・天皇、貴族、将軍等の命令からはなれて独立したのは徳川時代の中頃で、これが今の小工場をやっている人の祖先である。これは町人(今の市民)で金持が多くなったからだ。この小工場は、うまくやっていた人は大工場になつたが失敗した人は賃織におちぶれていった。
・織元は問屋がなつたもので、賃織の

人々をうまく働かせてもうけた。これは徳川中期以後において西陣織が多くの人に買われるようになった時代に、作る人と買う人の間に入りこんだものだ。
・大工場は明治時代になつてから大織元や大問屋が自分の資本をなげこみ、そのうえ政府からたすけてもらつて(金をたくさんかりて)外国の便利な機械を買つてたくさんつくりだし多くもうけたので、だんだんと大きくなつてき

たのだ。
・天皇、貴族、武士等の命令にくられて作っていたが、これらの力のなかつた時代、また力の弱かつた時代はいつも多くの人々が買えるような織物をつくる工夫をして生きのびてきている。
以上が大体討議やさらに子どもの書いた感想のなかにでてきた西陣織の歴史の理解である。さらに意見として、
・西陣織は歴史全体から見て、天皇、幕府、貴族などがぜいたくをしたときに

単元 『西陣織』＜中小工業＞(五年)の研究

繁昌している。民主主義の今の世の中ではこんなやり方ではだめだ。しかも貧乏な人の多い今の日本ではもつと安い品物をつくるようにしたらよい。
・「つづれ織り」や「金らん」等の機械ではできない細かい模様をつくる工場

は少くして、他はもつと機械を作つて大量生産し、安いねだんのみんなが買えるようなものをどんどん作ればよい。
西陣機業の現代の行きづまりの打開策として一応正しい見解であると思う。結

論をだすのをまだ急がずに、年表からでてきた子どもの疑問をとりあげた。
それは、
・福井は大正の始めに、桐生は昭和の始めに機械化が完成しているのに西陣は今でも手織機が多いのはなぜだろう

西暦年	時代	西 陣 織 の 歴 史
0	原時 始代	○応仁天皇の御代に中国(しん)から織り方が伝わった
100	大和 時代	○京都の太秦が中心地になった
200		
300		
400		
500		
600	飛時 鳥代	
700	奈時 良代	
800	平時 安代	○桓武天皇が「おり部司」をおいて宮廷の人々の服をつくられた
900		○藤原氏がぜいたくをしたので織り方がとても発達した
1,000		○十二単衣(女)衣官束帯(男)が出来るようになった
1,100	鎌倉 時代	○幕府が出来たが衣服の伝統は京都に残った
1,200		○政権が鎌倉に移ったので一時さびれた
1,300		○武士の服装は藤原貴族程ぜいたくではなく、特に頼朝は質素をすすめたので需要が減った ○今までの天皇、貴族のものを作ることから民業に切りかえた
	吉時 野代	
1,400	室時 町代	○応仁の乱の西之陣、山名宗全の陣地のあった所から「西陣」の地名が生れた
1,500		○幕府に品物をおさめる代りに業者がふえたりしないように独占する権利をうけた(座)
1,600		○大舎人座が西陣の祖先である
	桃時 山代	
1,700	江 戸 時 代	○秀吉が奨励したので豪華な金らん唐織等が織られるようになった
		○宮廷 将軍 上級武士のぜいたくな着物を作った(御用品といった)
		○新井白石が中国から入る生糸の輸入を制限したので国内で養蚕が盛んになった
		○西陣では輸入生糸ばかり使っていたので困った
		○元禄時代 吉宗の緊縮政策
1,750	江 戸 時 代	○西陣が絹織物の日本一の産地として威張っていることが出来なくなり、全国から産出されるようになった。丹後、桐生、町人の中にも金持が出来て、西陣織を買う者がふえて来た
		○大火事があって、機械が半数やけてしまった(西陣焼け)
		○火事で機械を失った弥兵衛、吉兵衛が桐生へ行って西陣織りの織り方を教えたので、桐生に織物が出来るようになった
1,800		○御用品や高級品ばかりでなく、大衆的な織物を織って他地方と競争した
		○織元や賃機が発生した } 問屋・織元が実力(支配力)を持ち始めた ○振機・伏機・仕入機が出来た
	明 治 時 代	○福井、桐生等に比べて人々の考え方が、伝統を守る考えが強く発達がおくれた
		○一部の資本家金持には売れたが、一般の多くの人々の買う実用品や輸出品は完全に福井(輸出品)、桐生(実用品)に負けてしまった
		○フランスからジャカード機、イギリスからバタタン機の輸入をした
		○動力織機(力織機)をイギリスから輸入した
1,900		○人々の考え方が古く輸入機械を仲々使用しなかった。また資本が少なくて購入する力がなかった。北垣知事が金を貸して機械を買わせ、また若い職人を集めて使い方を教えさせた。然し仲々普及せず福井、桐生に比べて今でも手機(手織)が多い
	大時 正代	
	昭 和	○福井では大正の始め頃には完全に工場工業、機械工業になった
		○「御石」の製法は殆んど力織機が用いられるようになった
		○桐生も昭和の始め頃に殆んど工場・機械工業になった
		○西陣では福井や桐生に機械化、工場化がおくれたばかりでなく、進歩していない
		○西陣織の帯地のおりが複雑で仲々機械化出来ないのが帯地が原因となって機械化がおくれた
1,950	和	○太平洋戦争のために機械の大部分がつぶされ、生糸が少なくなって非常にさびれた ○戦後 やみで一時たくさんうけたが、まただんだん売れなくなってきている ○今でも手工業でやっている人の方が多い

永田時雄著『社会科の新しい授業＜高学年＞』(一九五七年刊明治図書)より

か。

という問題である。この問題を契機にして桐生、福井との比較研究を計画した。すなわち西陣織は封建的な時代に特別な権力をもった階級のぜいたく心を満たすためにつくられ栄えてきたものなのだ。そして作る人は、いつも賃織業者のような性格をもっていたのだ。こんなやり方ではいつも下働きばかりだ。今でも賃織業者は七十パーセントもいる。いつたい他の絹織物産地ではどうしてやっているのだろうか。「賃織業者等はいのか」、「うまいついているのか」という意識でこの研究に入った。

五、桐生、福井の生産のようすを調べる

西陣織の販路が漸減しているのは桐生、福井の製品の進出が大きな原因であるといわれている。そこで桐生、伊勢崎地方、福井地方の生産の様子を調べることとした。この学習には教科書の「機械はめぐる」（坂西志保編日本書籍）「生活は進む」（同前）さらに「綴方風土記」（平凡社）が、子どもたちの資料として興味もあり、てごろで適切であった。桐生、伊勢崎地方をしらべるグループと福井地方をしらべるグループとにわけて「西陣織と違う点はどんな点か」という観点を中心にしらべていった。

1、福井地方を調べたグループの報告

- ・江戸時代藩主（大名）が暮らしを豊かにしようとして、しようれいしたことからは始まり、現代でも福井県の重要な産業になっている。
- ・一毛作（麦がつかれない）で農家の収入が少いこと・冬に人手が余ること・湿度が高くて電力が得やすいこと（盛んになった条件）
- ・明治の終り頃に完全に機械工業になった。
- ・白山火山脈の火山灰で、できている土が、蚕の餌になる桑の栽培に適する。
- ・輸出品が中心の生産であったが、戦後アジア貿易がほとんどできないので、国内むけの品物を作っている。切りかえができにくくうまきもうからない。やっぱり福井は輸出を盛んにしないとだめだと考えられている。
- ・大工場では今でも農家のひまな時に下請けをさせている。これが重要な農家の収入になっている。

2、桐生、伊勢崎地方を調べたグループの報告

- ・江戸時代の享保の頃、西陣の織り方が伝わったのが始まりで、ここでとれる生糸と農家の安い労働力が発達した

なったものである。

- ・織元を中心にした問屋制の手工業であったが、昭和の始めごろまでに工場が建ち、ほとんど機械化された。
- ・那須火山脈の火山灰が桑の栽培に適する。
- ・日本最初の機械による絹織物の製造工場が富岡市にできた。
- ・大衆向の実用品を作っているが、化学せんいによる安い品物ができてきたので余りうれえないので困っている。
- ・農家の副業として今でも大工場の下うけの「賃織り」がおこなわれている。

3、機械・工場の大きさの比較 (機械)

きかい 地方	力織機	手織機
福井	100%	1%
桐生	96%	4%
西陣	34%	66%

(昭和十一年調)

(工場)

工場の 大きさ 地方	5台 まで	10台 まで	50台 まで	50台 以上	計
福井	9%	21%	60%	10%	100%
桐生	49%	26%	23%	2%	100%
西陣	92%	5%	2%	...	100%

(昭和十三年調)

この三つの資料を見て「西陣織とちがう点は何か」という観点で発表させ、さらに「西陣織とよくにている点は何か」という観点を考えて、まとめて行つた。「よくにている点は何か」の観点は「子どもがよくにていることも多いな」等と発言してきたからであり、また、このよくにている共通の問題点こそ日本の絹織物工業全体の課題が子どもたちの目に見えてくると考えたからである。

4、西陣織の生産とちがう点

- ・桐生では安いねだんの実用品、福井では輸出品を中心に作っている。
- ・機械化が大へん進んでいて大量に安いねだんで生産できる。したがって市場が広く買う人が多い。
- ・原料の得やすい生糸の生産地を附近にもっている。
- ・どちらも副業として発達してきたもので、今でも賃織りの人は副業である（西陣織の賃織りの人はそれだけの収入で生活している）。
- ・技術が西陣織りにくらべて簡単であ

る。

- ・大工場が西陣にくらべてはるかに多い。

5、西陣織の場合とよく似ている点

- ・福井でも桐生でも戦前のように売れない。原因は

①貿易、とくにアジア向けの輸出が制限されているので自由な輸出ができない。

②化学せんいの衣料がたくさん安くできてきて、絹織物がだんだんうれなくなつてきている。

③貧乏な人が日本全体に多くなつてゐるのだ（少年朝日年鑑より）。

- ・洋服を着る人が大変多くなつてきたので、着物の売れる量が次第にへつてきている。

- ・「賃織り」をしている人が福井にも桐生にもまだたくさんいる。

- ・桐生では糸を先にそめて織るむつかしい西陣によくに織り方がある。

- ・桐生では手織機がまだ相当あり、五台以下の機械しかもっていない小工場が多い。これらの工場ではやはり西陣のように、家族の人が長い時間働いているのだろう。

- ・西陣では太平洋戦争によつて織機が多くこわされたが、福井や桐生もこわされ、そのうえ桑島が開墾されて大変すくなくなつてしまった。

くらべて違いを見つける学習、いわゆる比較研究はこの年齢の子どもは非常に興味をもち、また相当深く考えうる。この福井桐生との比較研究は大変活潑な討議や発表の中に学習が進められた。しかもこの学習の過程において子どもたちが実感したことは、郷土産業西陣機業のあらゆる面における後進性であった。たびたび「先生、西陣はだめですね」、「なぜ福井や桐生のように早く機械が買えなかつたのですか」、「こんなにおくれていることを西陣の人は知っているのですか」、「市長さんらは知っていたのでしょうか」と目をかがやかせて語る幾時間かの充実した学習であった。そこでこれらの子どもたちの意欲と今まで学習してきた内容をもとにして、「西陣織の今後のあり方」を作文につくり、それをお互いに発表しあつてよい改革案をつくることに進めた。

六、西陣織がこれから発展するためには

どうすればよいかを中心に作文をつくりこの単元の学習のまとめをする

ここで今までの学習の復習をかねて作文を書く観点をつくるために、次のような項目を示した。

- ・見学や調査でしらべた西陣織の今のようすから考えて
- ・西陣織の歴史、年表を見て考えたことから
- ・桐生、福井地方のことをしらべたことから

子どもたちは大変な意気込みで書きあげた。以下その主なものをあげる。

「おじいさんや、お父さんが、西陣織の自まんばかりするので、僕も西陣織はすばらしくて京都の誇りの一つだと思っていた。しかしよくしらべて見ると、その作り方や作る人々の生活等は桐生や福井にくらべてずい分おくらしている。しかも社会の本に出てくるイギリスの産業革命のようすとくらべるとずい分おくらしている。こんなことでは、自まんばかりしておられない。作り方でもつと機械を使つて作る人の生活が、もつと楽にできるようなやり方をしないと少しも自まんはできないと思う。」

「西陣織は他の地方ではまねのできないすばらしい品物ができるが、その織り方を覚えるのに二十年もかかるという。もつと早く誰にでも覚えられるようにできないものだろうか。もつと工夫して便利な機械が発明できないものだろうか。僕はよく考えると豊田佐吉のように発明できると思う。」

「私は友だちと賃織をしている家を見せてもらいにきました。ろうじの細い道を通つて家に入ると庭(土間)に機械が二台ありました。年をとつたおばあさんが、めがねをかけて織つていられました。もう一人はお父さんらしい人でした。家が暗くてほこりだらけでとてもかわいそうだと思います。しかもあんなにしてやっている人が一番お金がもうからないのだと知つて、私は何だか腹がたつてくるように思いました。誰におこればいいのでしょうか。」

「賃織の人はみんな相談して、機械を置いて仕事をする家と住む家とわけてやるようにしたらよいと思う。そうしないと体を悪くする。それからみんなで力を合せて工場を立てるように努力して行かないとだんだんこまつて行くばかりだ。」

「化学せんの安い原料を買つてそれに西陣織のよい柄をおるような工夫はできないだろうか。そうすれば安くできてよく売れると思う。」

「天皇や幕府や金持等の着る物ばかり作つて、自分たちは貧しい生活をしている。不公平だ。もつと誰でも買えるようなものを作つた方がよいと思う。」

どの子どもも相当核心にふれた西陣織の改革案を子どもらしい考えで述べた。私は一枚一枚感激の中によんで子どもたちの逞しい改革への意慾にうたれた。鼻を出している子、宿題を忘れる子、それらの子どもから私は新しく伸びている力を感じずにはいられなかつた。これは文集にして冬休みに完成し各家庭や見学させてもらった工場、家、また資料をもつた人々に配つて批判を願う予定である。

Ⅲ 指導上の反省

1、内容が、五年生としてはむづかしいのではないかと再三考えたが、子どもたちは終始非常な意気込みで調べ、かつ考えていった。思うに、子どもたちは、人々が一生懸命働いているにもかかわらずその人々の生活が不幸であるような事実、しかも一方では楽をしている人々があることを知つた時の純真な怒りは多くの大人よりもはるかに強い。この単元で現状の打解策がたびたびとびだしてきたのもそのためである。しかし反面、早急な現状解決案、一方的な考えで満足し易いので、指導上子どもの視野をひろげて、多角的にしかも掘り下げて行くような学習能力をつけることが必須であると思つた。

2、歴史の取り扱いが少し広すぎたと思つたが(もつと問題点に関係のあることだけを重点的に)、子どもが「それからどうなつたのですか」、「こんどの時間はどうなるのですか」と非常に興味を持つたのでつい長くなり、焦点はずすおそれがあつたのは、今後考えねばならないと思つた。

3、京都のような大都市における単元学習は、その主題の現実の全体的な把握ならびに分析が非常にむづかしい。現場の学習や調査はあくまでも全体の特殊な一部面にかぎられることが多い。全体的な把握、正しい現実分析にはどうしても確実な資料が必要である。この点京都大学の堀江、後藤両先生から再三御親切な資料の提供と御教示をいただいたことは、最もうれしいことであつた。今後あらゆる単元に学者の御協力がいただければ都市の単元学習もいよいよほんものになると思つた。

4、後になつたが馬場先生から十二月号で御教示いただいた「生産にまつわる矛盾を掘りさげよ」のことば、あれ以来たえず私の頭にやきついて、展開中予定したプランより展開は大きく改造することになつた。改善になつたか、改悪であ

つたか。

第二部・実践記録「西陣織」の検討

1 永田さんから相談をうけた者として

後 藤 靖

十一月の初めに永田さんから送られてきた五年社会科単元の「西陣織」のプランを読んで、正直にわたしは頭をさげました。これほどプランが、全教科課程を一身で切りもりしてゆかねばならない、それこそ文字通り休む暇もない多忙さのなかで編みだされた努力は偉大なものだし、またそれだけの仕事を着々と実践してゆかれる永田さんの生徒への愛情に心から敬服しました。十二月に入つて永田さんが来訪され、このプランを立てられた動機と経緯とを詳しくお聞きして、さらにその感を深くした次第です。このような教育方法は現在の教育機構＝行政のもとでは、非常な抵抗を要することだし、同じ職場の他の先生達からさえ疎外される危険をおかして実行されねばならぬことも、知ることができました。これまで、わたしたちは大学の研究室で「国民的科学」を志向しつつついていたつもりなのですが、このような苦しみは何ひとつ応えていながつたといわざるをえない点で、やはり「非国民」的場所で空転していたことに、深い反省を与えられました。そして改めて、小学校から大学までの良心的な先生方の学問の面でも、教育の面でも、もつと緊密な連繫がなされねばならぬことを痛感しました。

だから、わたし自身永田さんのこのプランを論評することはおこがましい気がして執筆をちゅうちよしたのですけれど、永田さんのこのプランがよりよい成果を収めるうに、何かお役に立てばと思つて、一二の駄足を述べてみる決心をしたような次第です。わたしの思いついた点を箇条的に並べてみましょう。

I 西陣機業は日本の産業において、どのような規模のものとして理解されるべきか

この点について、永田さんの考想があまりはつきりしていないように思われます。永田さんのプランでは、西陣機業内部での資本別区分—大工場・小工場・織元・賃織—は極めてよく編成され、それらがもつ経済的諸条件も詳細に分析されているといえます。けれども西陣における「大工場」が、それ自体日本の産業全体から見れば、中小工業に属しているのです。この点をはつきりしておかなければ

れば、たとえば「大工場」という項のなかで書かれている金融および販売関係が、無条件に有利だという印象を与えるように感じられます。わたしが調査した昭和二十三・四年のあのインフレの迷夢によわされて、一見はなばなしくみえた当時においてすら「大工場」の経営は、表裏相反していたようです。とくに現在のような購買力の減退している時期にあつては、その苦しみは一層はげしいものと思われまふ。そしてこの経営の困難さが織元の賃金を実質的に切下げることにもなるわけです。御承知のように、資本主義社会においては中小工業は没落する必然性をもつのですが、そのような一般法則が西陣機業において、具体的にどのような形で現われているか、という問題の設定をしていただきたいと思います。このことは、織元の場合にも当然いいうことです。とくに織元の苦しみが賃織業者に転嫁されることを考えれば、以上の点はさらに重要だと思ひます。小工場＝自営業者については、この層が現在どれほどの独立性をもっているかが問題となるのではないのでしょうか。自営業者といいながら、原糸の購入から製品の販売まで、完全に自前でやっているかどうか、事実上は賃織的存在に転落しつつありわしないか、という点です。この問題は、ここ数年にわたる自営業者・賃織の増減を考察する必要もあると思ひます。ただ、注意しておかねばならないことは、零細手工業は大して資本も必要でないため、新規の業者が登場し、全体としての量的把握でははつきりつかめないうことです。だから賃織業者の前身を調べることを併用しなければなりません。

以上のことをつづめていいますと、中小工業としての西陣の危機が、どのような形で具体的に現われているか、さらにこの危機において西陣内部での大工場・小工場・織元・賃織の対抗関係が現われているかということです。

Ⅱ 機業の発展を見落してはならない

これを考える場合、便宜上二つに区分してみることもいいかと思ひます。一つは、Ⅰでわたしが西陣の危機を具体的に把握することを註文したのですが、これを切りぬけるためにいろいろな方策がとられていることも事実です。その方策がすぐ発展だとはいえないにしても、発展を志向するものとはいえるでしょう。その現われとして手織機から力織機への転換、つまり技術的変革が考えられるのではないのでしょうか。そこで、西陣機業全

体としての織機数はどうなつており、そのなかで手織機と力織機との比重がどうかわつてきているかという点を、できれば長期間資料的に検証する必要があるのではないかと思います。そのさい、資本別および製品別部門での検討も忘れてはなりません。このことは西陣の危機とそれの脱出方向を考える糸口になるとも考えられます。と同時に、西陣の機業がいわゆる「固有西陣」からどのような変貌を示しつつあるかの歴史的検証にもなりうと思ひます。二は徳川中期以降とくに天保年間の「西機」の発生は、西陣の新しい発展方向を定めたわけですが、その後明治に入つて力織機が導入され、生産方法が変つてきます。それはとりもなおさず発展の道に直結していたわけですが、そのような生産方法・技術的変革は桐生や福井に対抗する意味をもつていたと考えられます。そこで、そのような発展を導き出した力はどこにあつたか、それを契機にして西陣はどう変つたかを考えていただきたいと思います。

Ⅲ 生徒の着眼について

「子どもの着眼」をよんで生徒をこのような創意性にまで導かれた永田さんの教授方法には全く感服の外はありません。熟読していると教室における永田さんと生徒の討議がほうふつとして目にうかできます。しかしわたしはここで二つの点を指摘せざるをえません。それは単にわたしの杞憂であるかも知れませんが、そうであれば幸ですが、その一は、西陣機業はどうすれば発展するかということについての「子どもの着眼」です。ここでは、手織機の力織機への転換とか、「化学せんいの安い原料を買つてそれに西陣織のよい柄をおるような工夫」とかいちいちもつともなことばかりですが、ただ技術的改良が中心課題になつていような感じがします。また業者の立場からもかけはなれた場所であらうかといふことではないでしょうか。といつてわたし自身はつきりした西陣復興プランはもつていないので、わたしも一番困つている問題ではありますけれど。それにしても技術改良という点はⅠの点をふまえることによつて、或程度はすくえるのではないかと思います。つぎには、日彰校児童が多く問屋筋の子弟だといふ点からでてくる杞憂です。つまり、問屋筋の子弟として、西陣の現状を肯定するような生徒もあるいはあるのではなからうかと思ひます。「織元はずい」とか「大工場ほどたくさんうけて、小工場

や賃織業者ほどもうけが少なくなつていふ。これではだめだ」、あるいは「賃織の人はかわいそうだ」といふような結論にまで生徒たちの意見が一致する。このプロセスが実践記録では余りはつきりでないで、こういう疑問を提起したわけです。この点については「指導上の反省」のところで、永田さん自身も暗黙のうちに述べられているようですから、附言したまでです。

以上三つの点について指摘してみましたけれども、わたし自身まだはつきりした構想がねられていないし、永田さんのような立場で西陣をとり上げていゝなかつたために、極めて不十分にしか論評することのできないことを、残念に思うと同時に、まことに申しわけないと思ひます。わたし自身の専攻が経済史という点からも、西陣の現状にもうとくなつてしまいました。今後永田さんにいろいろ教えていただきながら、わたしも真剣に考え、民族産業の復興・平和と独立のための社会科教育という立場から、このプランをもつともつと多面的に強化してゆくことをお約束して筆をおきます。(京都大学経済学部講師)

(「カリキュラム」1954年2月号所収)

《編者注》 京都市の名門校といわれた日彰小学校の校区は西陣織や京友禅その他の問屋、商店が多く、中産階級の子どもが多かつた。その子どもたちを4年から持ち上がつて、昭和28年度、5年生を担当した永田時雄氏(昭和元年12月生まれ。昭和19年京都師範卒)は、夏休みに「西陣織」のプランを練り、本格的にその実践に着手したのは10月に入ってからであつた。なお永田氏は昭和32年日本生活教育連盟の実験校たる和光学園小学部に移り、昭和41年退職した。その後荏原製作所に勤務し、企業内教育の分野を開拓していった。